



Title	Before節の時制構造に関する一考察
Author(s)	富永, 英夫
Citation	Osaka Literary Review. 1984, 23, p. 39-50
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25596
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Before 節の時制構造に関する一考察

富 永 英 夫

1. 本稿の目的は、英語の時の接続詞beforeを含む文の時制構造を考察することである。従来、時の接続詞は種々の立場から研究がなされてきたが、未解決の問題が多く、本稿はその残された問題の一部を解決しようとするものである。具体的には、次のような文の解釈の違いについて論じていく。¹⁾

- (1) I had seen him before he saw me.
- (2) I saw him before he saw me.
- (3) I saw him before he had seen me.

特に、(3)の例文のように before 節内に過去完了が現われる場合を、いわゆる counterfactual 読み (before 節の出来事が実際には起こらないという解釈) と関連させて、詳しく考察する。

まず初めに、この問題に関する従来の研究の中から、Jespersen (1931) と Hornstein (1977) を概観した後に、その問題点を指摘しつつ、独自の考えを述べていくことにする。

2. Jespersen (1931) には次のような記述があるが、突込んだ議論は見当たらない。²⁾

過去において続けて起こった二つの事柄 (X, Y), 例えば「私が彼を見たこと」[my seeing him] (X) と「彼が私を見たこと」[his seeing me] (Y) の関係は、図で表わすと次のようになるだろう。

— X — Y — (now)

言語的に、それらは二つの過去形によって表現することができる。

I saw him (first), and then he saw me.

あるいは、従位接続詞を用いて、

I saw him before he saw me.

とも表わしうる。しかし、過去完了形を使えば次のようにも表現できる。

I had seen him before he saw me.

I saw him before he had seen me.

He saw me after I had seen him.

He did not see me till I had seen him.

この場合、二つの出来事は時制によって文法的に結びつけられている。

ここで、本稿との関連で重要なのは、I had seen him before he saw me. と I saw him before he had seen me. であるが、Jespersen はこれらが同義であるともないとも明確には述べていない。Jespersen は興味深い指摘はしているものの、それは単に言語事実を記述している段階に止まっており、十分な説明はなされていないのである。

3. 最近の研究で注目に値するのは Hornstein (1977) であろう。彼は Reichenbach (1947)³⁾ で提唱された SRE 理論を使い、いくつかの興味深い分析を行なっている。ここで彼の議論を一つ一つ詳しくみていくことはできないが、彼の理論を簡単にまとめると次のようになる。

まず、Hornstein は以下に示す九つから成る時制体系を定義している。⁴⁾

- (4) (a) Simple past : E, R—S
 (b) Past progressive : \vec{E} , R—S
 (c) Past perfect : E—R—S
 (d) Simple present : S, R, E
 (e) Present progressive : S, R, \vec{E}
 (f) Present perfect : E—S, R
 (g) Simple future : S—R, E
 (h) Future progressive : S—R, \vec{E}
 (i) Future perfect : S—E—R

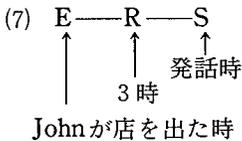
〔X, Y ならば、X は Y と同時。'X—Y' ならば、X は Y よりも時間的に先行。(X と Y は任意の S, R, E を表わし、X ≠ Y とする。)→は進行相を表わす。〕

このとき、S, R, E は、それぞれ発話の時点 [moment of speech], 言及の時点 [reference point], 事象の時点 [moment of the event] を指す。このうち発話の時点と事象の時点はあまり問題ないが、言及の時点は少々説明が必要であろう。これは文の基準時点とでも考えればよいもので、後で簡単に触れるように、文の時制や相はこの時点と他の時点との関係で決定される。話をわかりやすくするために具体例をあげる。

(5) At 3 o'clock, John had left the store.

(6) At 3 o'clock, John left the store.

(5)は「3時には John は店を出ていた。」という意味であるが、このとき言及の時点は3時であり、発話の時点はそれ以降、事象の時点はそれ以前のいつかである。これを図示してみると以下のようになる。



一方、(6)は「3時に John は店を出た。」という意味であり、言及の時点、発話の時点は(5)と同様であるが、事象の時点は異なり、この場合3時となる。



このように考えると、SRE 体系は次のような規則性を有していることがわかる。

- (9)
$$\left. \begin{array}{l} \text{'R---S' は過去} \\ \text{'S, R' は現在} \\ \text{'S---R' は未来} \\ \text{'E---R' は完了} \end{array} \right\} \text{を表わす。}$$

以上のことを認めた上で次のような構造を考えてみる。

(10) P_1 —TC— P_2

[P_1 は主節, P_2 は従属節, TC は時の接続詞を指す。]

まず, P_1 及び P_2 の時制構造(それぞれS, R, Eの組合せで表わされる。)を調べ, '二つのSを一致させて上下に並べる(これは主節と従属節の発話が同時と考えられるからである。)また, 二つのRも一致するように R_2 を R_1 の真下に移動させる(なぜ, ここでRを一致させるのかは大問題であるが, ここでは, 一応 Reichenbach のいう「言及の時点の恒久性の原則」⁵⁾に従うことにする。)このとき, いくつかの移動規則に関する条件があり, それらを破ったものは非文法文になる。例えば, 次のような例文を考えてみよう。

(11) John $\left\{ \begin{array}{l} \text{a. had come} \\ \text{b. came} \\ \text{c. *has come} \\ \text{d. *comes} \end{array} \right\}$ when we arrived.

a' E_1 — R_1 — S_1

E_2, R_2 — S_2

b' E_1, R_1 — S_1

E_2, R_2 — S_2

c' E_1 — S_1, R_1

E_2, R_2 — S_2

d' S_1, R_1, E_1

E_2, R_2 — S_2

[a', b', c', d' は, それぞれa, b, c, d の文をSRE表示したもの]

(11a), (11b)が適格文であり, 時の解釈を与えられるのは, R_1 と R_2 が一致しているからである。つまり, R_2 を R_1 の下に移動する必要はなく, 従って移動規則に関する条件には抵触しない。一方, (11c), (11d)が不適格な文になり, 時の解釈を与えられないのは, R_1 と R_2 が一致していないからである。この場合, R_2 を R_1 の下に移動させなくてはならないわけであるが,

そうするためには、 R_2 はどうしても S_2 を越えなくてはならず、時制構造の順序が変わってしまうのである。

ここで、Hornsteinは本稿で問題となっている時の接続詞 *before* に関して次のような解釈規則を提出している。

(12) Before 解釈規則

- a. もし E_1 が E_2 に先行 [$E_1 < E_2$] しているならば (つまり、 E_1 が E_2 より左にあれば) *before* のタイプ1の読み (最初に E_1 が起こり、そして E_2 が起こる) になる。
- b. もし E_2 が E_1 に先行 [$E_2 < E_1$] しているならば (つまり、 E_2 が E_1 より左にあれば) *before* のタイプ2の読み (E_2 は起こらない) になる。
- c. もし E_1 と E_2 が一致 [$E_1 = E_2$] していれば、タイプ1とタイプ2のいずれの読みも可能であり、そのどちらになるかは文脈で決まる。

(12a) は *factual* な読み、(12b) は *counterfactual* な読み、そして (12c) はそのいずれかで二義的であるということになる。Hornstein 自身があげている具体例は次のようなものである。

(13) Big Sam had escaped before he served his time.

(14) Big Sam escaped before he had served his time.

(15) Big Sam escaped before he served his time.

(13') E_1 — R_1 — S_1

E_2, R_2 — S_2

(14') E_1, R_1 — S_1

E_2 — R_2 — S_2

(15') E_1, R_1 — S_1

E_2, R_2 — S_2

(13)は主節で表わされている内容が先に起こり、従属節で表わされている内容が後で起こるということであるから、例えば、Big Sam は一度脱獄し、その後再びつかまって刑期を終えたという場合が考えられる。(14)は従属節で表わされている内容が起こらなかったことを意味するから、Big Sam は脱獄したために刑期を終えなかったという状況が考えられる。そ

して、(15)は上の二つのいずれの可能性もある。

以上が Hornstein の主張の要旨である。この分析が正しいかどうかは別にして、少なくとも Jespersen の記述に比べ、主張する点がはっきりしているところは評価できる。従って、次のセクションでは、この Hornstein の分析をもう少し詳しく見ていきたい。

4. 最初に、(12a) であるが、この点に関しては Hornstein の分析では問題はないうである。次の文を見てみよう。

(16) ? Mary had died before she finished her thesis.

この文が少しおかしい文になるのは、おそらく主節が過去完了形になっているため、「Mary は死んでから論文を書き終えた」という常識では考えられない意味をもつためであろう。(16)を次のように書き換えると、全く問題はない。

(17) Mary died before she had finished her thesis.

(18) Mary died before she finished her thesis.

また、次のような文で 'there' の場合は少し奇妙な文になるのも Hornstein の分析の裏付けになる。

(19) Bill had left the party before he killed a woman

$$\left. \begin{array}{l} \text{a. ? there} \\ \text{b. in the street} \end{array} \right\}$$

つまり、Bill がパーティーの会場を出て、その後そこに (パーティーの会場) で女性を殺したというのは意味的に不自然だからである。一方、'there' を 'in the street' にすると自然な文になるのは、Bill がパーティーの会場を出てから道で女性を殺すというのは十分考えられることであるからである。

次に、(12c) について考えてみる。これは、主節、従属節双方が単純過去形の場合は factual 読みと counterfactual 読みの二通りの意味があり、それを決定するのは文脈であるという主旨のものである。この Hornstein の

説明は決して明確なものとは言えないが、事実とは一致しており、時制の面からはこれ以上のことは言えないのである。例えば次のような文は、文脈によってどちらの意味にもなりうる。

(20) (=2) I saw him before he saw me.

つまり、

(21) A: Did he see you first?

B: No, I saw him (first) before he saw me.

では、「彼も私を見たけれども私のほうが先だった。」という出来事の順序を示す *factual* な読みだが、

(22) A: Did he see you?

B: No, I saw him before he saw me. (And I hid myself.)

では、彼は私を見たことにはならず、*counterfactual* 読みが成立する。

最後に、(12b)であるが、これは少々議論の余地がありそうである。この規則は、主節が単純過去形、従属節が過去完了形の場合について述べられたもので、この場合は、従属節の出来事は起こらないという *counterfactual* 読みになるというものである。次のような文がその例である。

(23) She died before she had seen her grandchildren.

(24) The bomb exploded before it had hit the target.

(23)は「彼女は孫の顔を見ることなく死んでしまった。」という意味であり、(24)は「爆弾は標的に命中せずに爆発してしまった。」という意味である。

このHornsteinの分析は、一見したところ正しいように思われるが、果たして本当にそうであろうか。次の例文に目を通してみよう。

(25) John slept with his wife before they had got married.

(Wachtel 1982)

Hornsteinの分析によれば、この文は(12b)のタイプに属するわけであるから、*before*節で表わされた事柄は起こらなかったことになるはずであ

るが、実際は、二人が後に結婚しても一向に差し支えないように思われる。むしろ、この場合は、'his wife' という語句からも明らかなように、「結婚した」という読みでなければならない。これは明らかに (12b) の反例であり、Hornstein は、この点に関しては誤っているようである。

さらに、次の文は決定的な反例である。

(26) Tom got up before the sun had risen.

Tom が起きようと起きまいと、日は昇るわけであって、この場合、決して counterfactual 読み（日は昇らなかったという解釈）は考えられない。やはり、counterfactual 読みが生じる原因は、(12c) でも見たように、before を含む文の時制構造にあるのではなく、文脈にあるようである。

この点に関して、Heinämäki(1972)に興味深い指摘がある。Heinämäki によれば、before が counterfactual 読みになるのは、対応する反実仮想文が真であると考えられる場合のみであるという。従って、次の(27)は(28)か真であるから counterfactual 読みになるが、(29)は(30)が真とはならないので counterfactual 読みにはならない。

- (27) Harry put money in the parking-meter before the policeman gave him a ticket.
- (28) If Harry had not put money in the parking-meter, it is expected that later the policeman would have given him a ticket.
- (29) Harry blew his nose before the policeman gave him a ticket.
- (30) If Harry had not blown his nose, it is expected that later the policeman would have him a ticket.

つまり、我々の常識として、パーキングメーターにお金を入れずに駐車すると罰金を取られるということはあっても、鼻をかまないからといって罰金を取られるということはないのである。しかし、もし仮に、鼻をかむことが法律で義務づけられている国があったとすれば、その国では(29)が、counterfactual 読みになることは十分に考えられる。

5. では、before 節内の過去完了形が counterfactual 読みを表わすのではないとすると、この表現には、一体どのような効果があるのでしょうか。まず、例文を見てみよう。

(31) He came before I had written the letter.

この文、及び(25), (26)における before 節内の過去完了形は不可欠な要素であり、この時制でなければ文のニュアンスはかわってしまう。話をわかりやすくするために、次のように過去完了形のかわりに単純過去形を使った例文と比較してみよう。

(25) John slept with his wife before they had got married.

(25') John slept with his wife before they got married.

(26) Tom got up before the sun had risen.

(26') Tom got up before the sun rose.

(31) He came before I had written the letter.

(31') He came before I wrote the letter.

(25') が「John は奥さんと結婚する前に交渉をもった。」という事実を客観的に述べているのに対し、(25)は「Johnは奥さんと結婚もしていないのに交渉をもった(手が早い!けしからん!)。」という「驚き、怒り」などの話者の主観的な気持ちまで伝えている。同様に、(26') が「Tom は日が昇る前に起きた。」であるのに対し、(26)は「Tom は日が昇らないうちに起きた(予想に反して随分早く起きたものだ!)。」となる。また、(31')が「彼は私が手紙を書く前にやって来た。」に対し、(31)は「彼は私が手紙を書き終らぬうちにやって来た(せっかく一仕事すませておこうと思っていたのに、早く来すぎだ!)。」という意味になる。

また、次の例文もそういった話者の心理状態をよく伝えている。

(32) She took a fancy to Philip and called him by his christian name before he had been in the shop a week.

(Maugham, *Of Human Bondage*, p. 510)

イギリスで christian name を呼び合うことは、お互いがかなり親しい間柄であることを示す目安の一つである。従って、そのような関係になるまでには、普通はある程度時間がかかるはずで、一週間ぐらいでそうなることは稀である。ここの過去完了形には「一週間も経たないうちに christian name で呼ぶなんて早すぎる！なれなれしい！」という気持ちが込められている。

- (33) In a point of fact, I met Strickland before I had been a fortnight in Paris. (Maugham, *The Moon and Sixpence*, p. 64)

パリの様な大都会では、二週間ぐらいの滞在で人がある特定の人物に出会うことは難しい。ここの過去完了形には「随分早く会えた。」という含意がある。

6. 以上の議論から明らかなように、before 節内で過去完了形を使うことによって、話者は、従属節の出来事が起こった後に主節の出来事が起こるという、実際とは逆の順序を期待、もしくは予想していたことを表現しようとしているのである。しかし、もちろん事実はその逆で、主節の内容が先に起こっているのであるから、話者の期待、予想は裏切られたことになり、話者は、それが早すぎるという怒り、あるいは驚きなどの気持ちを before 節の過去完了形で表わしているのである。以下、追加例を示す。

- (34) Before he had reached home, Gerald felt a revulsion from the whole subject of John and Larrie.

(Wilson, *Anglo-Saxon Attitudes*, p. 215)

- (35) Gerald got up from his chair. 'Look, Gilbert,' he said, 'I'm fed up with all this tommy-rot. I'm going.' But before he had picked up his gloves, Gilbert seized his sleeves. (*Ibid.*, p. 147)

- (36) Before they had left the room, however, Larrie returned.

(*Ibid.*, p. 195)

本稿の考察をまとめると、時の接続詞 before を含む文の時制構造とその

意味解釈は、次に示すようになる。

(37) a. P_1 [{ 過去完了形 }
 { 単純過去形 }] — before — P_2 [単純過去形]

すなわち, $E_1 \leq E_2$

⇒ 「 P_2 が起こる前に P_1 が起こった。」

b. P_1 [単純過去形] — before — P_2 [過去完了形]

すなわち, $E_2 < E_1$

⇒ 「 P_2 が起こらないうちに P_1 が起こった。」

注

- 1) 未来形の場合も考えられるが、未来形は多くの問題を含んでおり、ここでは過去形のみを扱う。
- 2) Jespersen (1931), pp. 81-82 参照。
- 3) Reichenbach (1947), pp. 287-298 参照。
- 4) Hornstein 自身も認めているように、この体系は完全なものではない。例えば、 $\vec{E} \text{---} R \text{---} S$ といった過去完了進行形も考えられる。
- 5) Reichenbach (1947), p. 293 参照。

参考文献

- Declerck, R. (1979) "Tense and Modality in English *Before*-Clauses," *A Journal of English Language and Literature* 60, 720-744.
- Edgren, E. (1971) *Temporal Clauses in English*. Uppsala: Almqvist & Wiksell.
- Heinämäki, O. (1972) "Before," *Papers from the Eighth Regional Meeting of the Chicago Linguistic society*, 139-151.
- _____. (1974) *The Semantics of English Temporal Connectives*. Doctoral dissertation, University of Texas at Austin. Reproduced by the Indiana University Linguistic Club (1978).
- Hornstein, N. (1977) "Towards a Theory of Tense," *Linguistic Inquiry* 8, 521-557.
- Jespersen, O. (1924) *The Philosophy of Grammar*. London: George Allen

& Unwin Ltd.

_____. (1931) *A Modern English Grammar on Historical Principles. Part IV.* London: George Allen & Unwin Ltd.

_____. (1939) *Essential of English Grammar.* London: George Allen & Unwin Ltd.

Lutzeiter, P. R. (1977) "The Counterfactual Reading of *Before*," *Amsterdam Papers in Formal Grammar* 1, 176-193.

Reichenbach, H. (1947) *Elements of Symbolic Logic.* New York: Macmillan.

Wachtel, T. (1982) "Some Problems in Tense Theory," *Linguistic Inquiry* 13, 336-341.

引用文献

Maugham, W. S., *Of Human Bondage.* (Penguin Books)

_____, *The Moon and Sixpence.* (Penguin Books)

Wilson, A., *Anglo-Saxon Attitudes.* (Penguin Books)